

小麦粉粘土活動からみる保育者志望学生の表現の過程と環境

松本 亜香里

要旨

保育者志望の学生が、こども理解について学ぼうえでも、遊びの継続性と発展性の欠落を考えるうえでも、学生自身が保育活動をこどもの立場で体験することが大切である。本研究では、保育者養成校に入学して3か月の学生が、小麦粉粘土を教材とした活動を通して、どのように遊びの過程を辿るのか、活動時の姿から分析し考察を行った。

筆者が領域『表現』の授業内で心がけていることは、多くを伝えないことである。保育者が必要以上に指示を出さなくとも、注意点だけを伝えるだけで、こどもたちがそれぞれの感性と興味関心により素材を楽しみ、遊ぶことにより、表現の幅が無限に広がると考えるからである。しかし、授業担当者である筆者が最低限のルールや情報しか伝えないために、活動の導入時には戸惑い様子を伺う学生の姿も見られた。対象学生2名は、粘土遊びは久しくしておらず、小麦粉粘土は初めてとのことであった。活動時両者は素材の扱い方や遊び方は異なるが、先行研究で示す粘土と発達年齢の段階を年齢の高低関係なく辿っていた。

これら一連の学生の姿から、保育者は、遊び自体をどのように運ぶかを考えるよりも、遊びがどのように展開されるか見守り、こどもが安心して表現できるような安全な環境を整えることが大切ということが、大人である学生にも言えることが確認できた。本分析から、三法令でいう「主体的な学び」と「対話的な学び」、「深い学び」が「環境を通しての保育」に支えられることが裏付けられた。

キーワード：表現，保育教材研究，保育者養成課程，小麦粉粘土，環境

1. はじめに

保育内容5領域における『表現』は「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」ことを目指している。「こどもが遊べなくなっている」という研究結果もある中で、筆者が普段目にするこどもの姿からは遊べるか否かは別として、「こどもは全身で表現をしている」という認識でいる。「遊べる」「遊べない」の判断視点は研究により多様であるが、共通して挙げられていることとして、遊びの継続性と発展性の欠落について述べられている。こどもは全身で表現する一方で、保育者志望の学生は遠慮や恥じらい、自信の無さからか控えめな姿が見られる。筆者が担当する『表現指導法』の授業では、表現分野のうち、身体と音楽、造形を含めて

いる。身体表現の活動では、「はじめは恥ずかしかったけど、恥を捨てて思い切りしたら楽しかった」という意見や「みんなで一緒に全力ですることによって恥ずかしさも忘れるし、もっと身体全体を使って表現したいと思った」という意見が授業後の感想の中で挙げられた。このことから、一見控えめに映る場合でも、表現するきっかけや環境を整えることで、そうでなくなることがあると分かる。

筆者は保育者養成に携わる中で、学生がこども理解について学ぶうえでも、前に述べた遊びの継続性と発展性の欠落を考えるとといううえでも、学生自身が保育活動体験をこどもの立場ですることが大切だと考えている。本研究では、保育者養成校に入学して3か月の学生が、小麦粉粘土活動を通して、どのように遊びの過程を辿るのか、活動後自身を省察する中でどのような学びがあるのか考察することとする。

2. 方法

＜学生Aと学生B＞

実施日時：平成30年7月3・4時限目（活動時間は各60分）

対象者：H短期大学1年50名（3時限目Aクラス26名、4時限目Bクラス24名）のうち各クラスから一名ずつ無作為に抽出

実施環境：H短期大学図工室 6テーブル使用、4～5名/テーブル

一人分準備物：小麦粉100g、水50cc（各自調整）、食塩少々、油少々、粘土板^{（注）}

手順：①各テーブル代表者が材料を取りにくる

（物的環境を考慮した、こどもの動線を確認するため）

②粘土板に小麦粉を出す

③塩を入れる

④水を少し入れる（入れ方は自由）

⑤まとまりがでてくるまでこねながら水や油を加える。柔らかさは好みで調整し、成形する時に乾燥してきたら少し水を加える

備考：小麦粉アレルギーの有無を事前に確認

（注）本来小麦粉粘土をこねる際は深さのあるボールを使用するが、数の関係上粘土板を使用した。

3. 小麦粉粘土

3.1 粘土について

保育で使用される粘土は、油粘土や紙粘土、土粘土、小麦粉粘土が多い。油粘土や紙粘土、土粘土は、すでに粘土があり、自由に形を変え、創作していく楽しみがある。小麦粉粘土は、すでに混ぜた状態のものもあるが、小麦粉と水等を混ぜてこどもがこねていく場合もある。

成田（2017）は、粘土の特質を次の7項目挙げている。①可塑性があり、働きかけに応じて自由に変化する。②働きかけに対する自由な変化は、新たなイメージを触発する。③作り直しが容易である。④「泥んこ遊び」から「自由な作品づくり」「食器などの実用品」まで可能である。⑤手を中心に足など身体全体を使うので、体性感覚に強く働きかける。⑥土粘土に含まれる「水」は人間にとって原初的な物質であり、「水」との触れ合いは心を安定させる。⑦粘土の適度な重量感は、手ごたえを実感しやすい。

3. 2 保育教材としての小麦粉粘土

小麦粉粘土は、小麦粉と水があればできる保育教材である。保存や遊びの広がりや考慮し、酢や塩、油、食紅または絵の具を用いることもある。粘土を着色するのであれば、濃淡をどうするのか原料の量を調整したり、斑にするのか均等に色を馴染ませるのか混ぜる度合いを調整したり楽しむことができる。色を作る場合、粘土の入れる前段階で着色原料を混ぜておくのか、粘土にそれぞれ着色したものを互いに混ぜ合わせていくかを楽しむことができる。同じ色でも硬度を調整して変化をつけて楽しむことができる。

他の粘土と違い、小麦粉粘土はこねる元の物体に至るまでにもさまざまな動作や手順が含まれる。小麦粉と液体、それぞれの感触、それらを合わせた時の混ざった部分とそうでない部分の視覚的・触覚的発見、混ぜ合わせていくうちに変化していく感触を楽しむことができる。さらに塊になってからどのようになめらかにしていくのかも、手指や腕の使い方、体重のかけ方などを工夫しながら行う。

粘土遊びは、自分がイメージしたものを形にしていく楽しみもあるが、その後、それらを使って見立て遊びに展開することもできる。小麦粉粘土では、成形したものを低温で長く焼けば、そのままごっこ遊びで使うことができ、ニスを塗ればさらに光沢が出て、感触もツルツルとしたものになる。

小麦粉は、日常の食事の中で「ピザ」や「パン」「うどん」「パスタ」など、様々な原材料になっていることから食育にもつながり、こどもが身近なものと感じながら触れることができるであろう。小麦粉アレルギーのこどもには米粉に代替えすれば同じような楽しみ方ができる。小麦粉も米粉も家庭で用意できるものであり、保育施設だけでなく家庭でも手軽にでき、家族で遊べるのも魅力である。

保育において小麦粉粘土遊びを行う際、環境は水場に近く、ねらいを考慮し3～4名が向き合って使える机を設置したい。また、粉を扱うため、床は絨毯でない方が好ましい。遊び終え、作品を飾る棚や台も準備しておくとうれしいであろう。

3. 3 領域『表現』と小麦粉粘土

小麦粉粘土は年齢を問わず楽しむことができる保育教材である。筆者が担当する授業内においても、学生は一人で集中して製作をしたり仲間と会話をしながら製作をしたりして

楽しんでいる様子が伺えた。

小麦粉粘土活動の教材研究を行う段階で、領域『表現』の視点から鑑みると次のような内容が含まれる。まず、小麦粉としての固体、粘土としての固体、または小麦粉と混ぜる前の水や油、塩など、“様々な素材”に触れることとなる（表1未満児①、以上児(5)）。混ぜたりこねたりする時には、歌をうたいながらこねたり、リズムカルにこねたりすることもある（表1未満児②）。こねながら粘土板に粘土をたたきつける音や水の音、粘土の色付けや色付け前の色作り、小麦粉単体での手触りや成形の過程の手触りや粘土の変形の発見、手指の動きと成形の関係など、様々な気づきや五感を使った感性が育まれる（表1未満児③、以上児(1)）。粘土活動時に、生活や遊びの中で美しいものや心に残るものをイメージしながら製作につなげたりする（表1未満児⑤、以上児(2)(4)）。自分の生活や遊びの中から、興味のあることや経験したことなどをイメージすることから、実際につくること

満1歳以上満3歳未満では

※保育指針では「保育士」、教育・保育要領では「保育教諭」と表記

- ① 水、砂、土、紙、粘土など様々な素材に触れて楽しむ。
- ② 音楽、リズムやそれに合わせた体の動きを楽しむ。
- ③ 生活の中で様々な音、形、色、手触り、動き、味、香りなどに気付いたり、感じたりして楽しむ。
- ④ 歌を歌ったり、簡単な手遊びや全身を使う遊びを楽しんだりする。
- ⑤ 保育士（保育教諭）等からの話や、生活や遊びの中での出来事を通して、イメージを豊かにする。
- ⑥ 生活や遊びの中で、興味のあることや経験したことなどを自分なりに表現する。

満3歳以上では

- (1) 生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。
- (2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。
- (3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。
- (4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。
- (5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。
- (6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。
- (7) かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。
- (8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

表1 領域『表現』の内容

へつなげる（表1未満児⑥、以上児(4)）。また、つくる過程で、自分の体験から感動したことなどをともだちに伝え合う。さらには、話の中で、個人の製作からともだちと役割分担を考えながら協力して製作する姿も予想できる（表1以上児(3)）。つくったものをお互い見せ合ったり、紹介し合ったり、飾ったりする（表1以上児(7)）。つくったものを用いて、役を演じるなどごっこ遊びにつなげて楽しんだり、工夫したりする（表1以上児(8)）。

4. 小麦粉粘土活動の様子

学生は、何をするか学生には伝えず材料を配ると、学生はそれぞれの材料に興味深そうに覗き込んだ。その後、材料を入れた紙コップを持ちその物体が何であるか予想するように、コップを斜めにしたり机に軽くたたきつけたりして、材料の動きや性質を観察していた。さらに、教員の指示があると、小麦粉を粘土板に広げ思い思いに素材を確認する学生、それを見て自分は待っている学生、半分以上を粘土板に出し少しコップに残す学生と、最初の段階からさまざまな学生の姿が見られた。以降、それぞれの過程は以下の表にまとめることとする。最終的には、食べ物や花などに見立てて一つの物を作る、同じ見立てでも小さな作品を幾つも作る、キャラクターや人形、きれいな丸に近づけるためひたすらころころするなど、作品も多種多様であった。一方のクラスでは、何人もの学生が一つのテーマの中で作品を持ち寄る姿も見られた。



写真1 小麦粉の素材を確かめている



写真2 水を加え、まとまり始めている



写真3 油を加え、馴染ませている



写真4 テーマを決め数名で合作

段階	学生Aの姿	学生Bの姿
①小麦粉の素材を味わう	小麦粉を粘土板に出し、何もせず待機している。 教員の「小麦粉で自由に遊びましょう」という声かけにより小麦粉をすくう。上から少しずつ粘土板にさらさらと落とす。 粘土板に落ちた小麦粉を集め、同様の動作を行う。	小麦粉を粘土板に出し、広げたり集めたりしている。 小麦粉を上からさらさら落とししたり、山を作りたたき固めたりしている。
②塩を加え混ぜる	塩を加える時は手を丸く指先を立てて、備中くわのようにしてかき混ぜる。	塩を加える時には、両手ですくい上げるようにして全体的に混ぜている。
③水を加え混ぜ合わせる	水を加える前に、小麦粉の塊の真ん中を空け、土手を作る。 水を少し加えては混ぜ、土手を作り、また水を加え混ぜる。	水を加える時は小麦粉の土手を作り、コップ半分くらい入れ、溢れたところから急いで混ぜている。 ある程度混ざったところで、さらに水を加えるが、配分された水を残らずべて入れて、みずっぽい小麦粉粘土ができる。
④油を加え混ぜ合わせる	ある程度固まってきたら油を混ぜ入れる。 油の時は、小麦粉粘土に塗るように加えていく。	そこに油を加えるが、水が多いため、成形が難しい状態にある。教員を呼び、小麦粉を加えたいことを伝える。 小麦粉を少しずつ友達に入れてもらいながらこねて混ぜる。 油は多めに入れたため、もちもちとした感触になったと感想を述べる。
⑤粘土遊びをする	粘土がなめらかになったら、丸にしたり棒状にしたりして変形を楽しむ。 丸や棒状から切ったりつぶしたり平らにしたりして、思い思いのものを作る。	丸めたり棒状にしたり、ちぎったり、平にしたりして遊ぶ。 粘土の表面に凹凸を付けている。 色を付けたいということで、急遽居合わせた造形の教員に頼み絵の具を使い着色する。色がなかなか粘土に馴染まず、色を均等に混ぜ込むのに時間をかけている。
⑥作品完成	小さい丸をいくつも作り、それらを潰しながらつなぎ合わせ花を製作した。油が多い方が花びらの成形がしやすいようであった。	最終的に一つの手の平サイズのオムライスを製作した。

5. 結果と考察

第一段階における学生Aは、小麦粉を粘土板に出すよう指示は受けその通りにするものの、その後どのようにしたら良いか分からず教員の指示を待ち、周りの学生の動きを観察している。その姿から、今までのAが受けてきた教育において「勝手に触らない」という意識が強く働いていると考えられる。教員の声かけにより小麦粉に触れてからも、すくっては上からさらさらと落とし、板に落ちた粉を集め、また上からさらさらと落とす動作の繰り返ししており、粉が散らからないように調整しながら粉遊びをしていた。一言言われたから触っているようにも映るが、Aは、何度もその動作を繰り返し、落とし方も握ったま

ま隙間から落とすところから、親指とその他の指をすり合わせながら落とすように変化していた。この姿は、Aが自分から粉の触感に変化を持たせ楽しんでいるとも捉えられる。一方、学生Bは小麦粉を板に広げたらすぐに、小麦粉を平面上で楽しみ、その後Aと同様に上からさらさらと落としたり、また山にして山を潰したりして様々な試し方をしている。山に指で模様を付けたり、穴をあけたりする姿も見られた。「粉遊び」だけでも、砂遊びのように様々なアプローチが見られた。

第二段階では、学生Aは指先だけで粉と塩を混ぜ、Bは両手の手全体を使い混ぜ合わせていた。小麦粉と塩は同色であるため、どの程度で混ざるか分かりにくい。Bは念入りに混ぜ合わせており、第一段階の粉遊びの続きをし、一方Aは「混ぜる」という工程を果たすという意識が感じられる。

第三段階では、学生Aは水がこぼれないようにドーナツ状に土手を作り、水は少量ずつ土手を崩しこぼれない程度を考えながら慎重に流し入れていた。ある程度混ざっては、水を少量ずつ加え混ぜることを繰り返し、終盤は塊の硬さを調節しながら水を入れるのではなく、塊に付けながら加えていた。一方Bは、Aと同様に水がこぼれないように小麦粉で土手を作るが、水の加え方がAのように何段階にも分けて入れるのではなく、用意されたコップの水半分程度入れるなど、小麦粉に対する水の加減というよりは与えられた水の量を何回に分け入れるかというところに意識が向いているようであった。その結果、水が土手の外に流れ出し、急いで寄せるようにして混ぜていた。ある程度混ざったところで、一度目の焦りを受け、次からは慎重に流し入れると筆者は思い見守っていたところ、Bは残り全ての水を一度に加えた。今度は一度目のように粉の状態ではないため、塊と水を混ぜ合わせることに時間がかかり、水が板の外にこぼれださないことに注意を向け混ぜているようであった。この段階でAの小麦粉粘土は耳たぶくらいの柔らかさであったが、Bの方は、水っぽく触ると小麦粉を水で溶いたものが手に付いた。

第四段階では、学生Aは油を流し入れるのではなく、塗りながら混ぜ合わせていく姿が見られた。Bは、水っぽい小麦粉粘土が「油によりまとまりが出るだろう」と言いながら混ぜるが、手に付きにくくはなったが、粘土が成形できる状態にはないということで小麦粉の追加を提案した。余っている人から集め、今度は泥団子の仕上げの要領で少しずつ小麦粉を加えていた。この姿から、水の時の経験を踏まえ、一度にまとまった量を加えるのではなく、少量ずつ加えるよう変化したことが分かる。Aの粘土はさらっとした触感に対し、Bの粘土はパン生地のようにもちっとした触感であった。Aは油を余らせ、Bは油を全て使ったことによる違いである。

第五段階の粘土遊びでは、Aはこどもの手指の発達同様、初期は手の平全体で粘土遊びを行い、その後、それぞれの指を独立させ粘土を引っ張ったりつぶしたりして遊んでいた。Bも同様にこどもの発達の変化のような手指の使用が見られた。Bは丸や棒状のまとまっている段階で、表面に凸凹を指を使って付けたり、紙コップの裏を使って円の模様を付け、

成形に加え図画のような要素も見られた。さらに、白だけでは物足りず、たまたま様子を見に入室していた本学造形の教員に頼み着色のために絵の具を借り、混ぜていた。Aは花びらを作る際、粘土をつぶす段階で端が割れてしまうことを教員に相談し、油を入れ粘度を上げる試みをしていた。Bは同様に粘土に着色していた友達に声をかけ、何人かで合作していた。

AとBは、粘土遊びは久しくしておらず、小麦粉粘土は初めて体験したとのことであった。同じ60分の活動において、AとBは素材の扱い方や遊び方は異なるが、成田（2017）の示す粘土と発達年齢の段階を両者は辿っていた。また、成田は、粘土を教材とする場合の表現の特徴を、1歳児頃は「さわる、いじる」2歳児頃は「痕跡をみたてる」3歳児頃は「～つもり」で大まかにつくる」4歳児頃は「イメージに添って大まかにつくる」5歳児頃は「イメージに添ってつくる」としている。表2では年齢の高低により段階が分けられているが、初めてする活動では年齢の高低関係なく辿る段階ということが、学生の姿から分かる。このように、保育者が必要以上に指示を出さなくとも、注意点だけを伝えてこどもたちがそれぞれの感性と興味関心により素材を楽しみ、遊ぶことにより、表現の幅が無限に広がると言える。

表2 粘土と発達年齢⁽¹⁾ 『心おどる造形活動－幼稚園・保育者に求められるもの－』成田孝著

低 ← 年 齢 → 高	
・ 感触を楽しむ	・ 経験したこと、見たこと、聞いたこと、知っていることなどを表す
・ いろいろ働きかける	・ 並べたり、組み合わせたりする
・ じっくり操作する	・ 生活の中で、興味・関心あるものを表す
・ 対話して言葉と絡める	・ 進んで模倣する
← 粘土遊び・自由制作 →	


5. まとめ

本研究で着目した一連の学生の姿から、保育者は、遊び自体をどのように運ぶかを考えるよりも、遊びがどのように展開されるか見守り、こどもが安心して表現できるような安全な環境を整えることが大切ということが、大人である学生にも言えることが分かった。筆者は、こどもが主体的であることは、こどもだけでなく保育者自身が「楽しさ」を感じられることが重要であると考えている。このように、保育者志望の学生も授業や自身の普

段の生活の中で、保育教材研究を楽しみながら行うことができるよう、授業を組み立てていく必要がある。また、言うまでもないが、こどもにとって安心して表現できると思える前提には、日頃の保育者のこどもへのまなざしと丁寧なかかわりが必要不可欠である。


小麦粉粘土体験とともに、保育教材ノート作成を課題としたが、大学入学後3か月の中で、ノートの作り方や取り方、メモ書きの工夫等がみられた(資料1・2)。このように、学生自身が遊びを体験することと、表現を軸としたこどもの姿の捉え方、保育教材ノートの作成を並行して行うことにより、遊びを考える習慣につながると願う。

小麦粉粘土



～作り方～

- ① 机の上に台を置いて、その上に小麦粉をのせる。
- ② 小麦粉でドーナツの形を作り、真ん中に水を入れる。
※少しづつ水を入れると良い。
- ③ まるくなるようにこねる。
※かたさは「耳にぶ」か「二の腕」くらい。
- ④ 途中で塩または酢を入れてこねる。
※塩または酢を入れることで腐りにくくなり、長持ちする。
- ⑤ 油を入れてこねる。
※全体になじむようにこねる。
- ⑥ 完成!



～工夫～

- ・塩の量を混ぜて、色をつける。
- ・台を使って線をつける。
- ・他の人が作、た小麦粉粘土と自分の小麦粉粘土のかたさを比較する。
- ・低温で長くことで保存できる。

☆材料☆ 小麦粉：水＝3：1

- ・小麦粉(薄力粉)
- ・水
- ・塩 or 酢(適量) お好みで調整
- ・油(適量)

☆ポイント☆

- ・食育 ・想像力、計画力
- ・色育 ・集中力 ・かたて遊び
- ・創造性、自覚性 ・ごっこ遊び
- ・手先を使う ・比較概念 談話の理解

☆応用☆

- ・ボディフラインディング ・穴をあけておくヒールホルダー
- ・小麦粉アレルギーの子や人でもいる場合は米粉を利用する
- ・ドロドロした状態の粉土にして、空のスチーマーに入れると大きな木の葉の形の葉な感覚で遊ぶ


すばらしい!

資料1 学生の活動まとめ①

小麦粉粘土

知恵と書(簡単に)

- 1.ダンボールとチラシを重ねて台を用意しておく。
- 2.その上に小麦粉を広げ、塩を一つまみほど入れて混ぜる。
- 3.少しずつ水と混ぜていく。(後で粘土の固さを調整するときには小麦粉をすべて混ぜずに、少し残しておく。)
- 4.混ぜている途中で油も少し足し、こねていく。
- 5.耳たぶくらいのやわらかさになったら、出来上がり。


← 私はギョウザを作りました!

ねらい

- ・食育
- ・色育
- ・創造性、自覚性
- ・手先の器用になる
- ・想像性、計画性
- ・集中力
- ・みたく遊び、ごっこ遊び

比較の概念、言葉の理解

☆材料☆

- ・小麦粉 3 (薄力粉) 食料
- ・水 1 インスタントコ
- ・塩 酢 (適量) 酢系/クコン
- ・油 (適量)

☆ポイント☆

- ・アレルギーの子でも一人でもいる場合は、米粉を使う
- ・色の濃淡を使い分けて、マーガレ模様にしたりして工夫する。

☆応用☆

- ・薄め具合で目的が多様に
- ・ボディペインティング
- ・スライム (水を多めに入れる)
- ・手形をつけて作品をつくる

そのほかの作品が作れるようになったら、次は薄くはみく。

粘土の乾燥に1時間かかるともよくある。

必ず乾燥に1時間かかるともよくある。

油が乾いたら
厚紙を剥がして

粘土が乾いたら
1時間かかるともよくある。

資料2 学生の活動まとめ②

引用文献

成田孝：心おどる造形活動ー幼稚園・保育者に求められるものー、p41、大学教育出版、2017

参考文献

文部科学省：幼稚園教育要領解説、フレーベル館、2018

内閣府文部科学省厚生労働省：幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説、フレーベル館、2018

厚生労働省編：保育所保育指針解説、フレーベル館、2018

神谷英司：子どもは遊べなくなったのか「気になる子ども」とヴィゴツキー=スピノザ遊び理論、三学出版、2011

加用文男：「遊びの保育」の必須アイテム保育のなかの遊び論 Part2、ひとなる書房、2015

幼少年教育研究所編：遊びの指導力・幼児編、p165、同文書院、2014

大場牧夫：表現原論 幼児の「あらわし」と領域「表現」、萌文書林、1996

無藤隆：事例で学ぶ保育内容 領域表現、萌文書林、2008